



アトル・ウォルメ

成体は普段は擬態して岩や地面の中に隠れ、哺乳動物を獲物とするイソギンチャクの仲間である。擬態の能力はかなり高く、実際に岩肌を触らなければほとんど見つからない。ただし、かすかに生臭い臭いを放っているため、訓練された犬を連れていけば、見つけることができる。

擬態を解くと岩が裂けたように広がり中から触手が伸びてくる。「アトル・ウォルメ」とは水晶の虫という意味で擬態を解いた際の触手が紫やピンク色をしていることからこの名前がついたといわれている。美しい名前とは裏腹に危険度の高い生物で注意が必要。

気がつかず目の前を通ると粘液や触手で捕獲され、内部へ飲み込まれる。取り込まれた動物がオスの場合はそのまま溶かされて消化されてしまう。メスだった場合は繁殖用の寄生体を植え付けられる。寄生体はアトル・ウォルメの長く太い交接器によって子宮内部に産み付けられ着床する。そこから産卵管が伸びて膈外へと露出する。定着した寄生体は外科的な手術によってしか取り除くことができず、手術をしたとしても生還率が低いため、ほとんどの場合はそのままになることが多い。寄生体は特殊な分泌液を出して、宿主を発情させる。その効果は絶大で、多くの場合、宿主の精神は崩壊してしまう。やがて宿主が自我を保てなくなり自制心を失う。その後、ほかの哺乳動物のメスを闇雲に襲うようになる。寄生体から生えた産卵管をその動物に差し込み動物の子宮に卵を産み付ける。

実際にアトル・ウォルメの生息が確認される地域では寄生された犬や牛馬などが人を襲うという事件が報告されている。産み付けられた卵は数時間で孵化してまた寄生体となる。孵化する前に卵を子宮から取り除けば寄生を回避することもできる。しかし寄生体の産卵の際には卵とともに強力な麻痺毒が注入されるため、ほとんどの場合襲われた動物は卵が孵化するまで動けなくなる。こうして連鎖的にアトル・ウォルメが「感染」していくことになる。繁殖の時期が終わると、子宮に定着していた寄生体は体外へと這い出てきて、その地面落下し、成体になるまで擬態する。こうして哺乳動物の力を借りてアトル・ウォルメは生息域を拡大するのである。寄生体から解放されても、分泌液の作用で崩壊した自我はもどらず、日常生活ができなくなる場合が多い。

近年、人や家畜への多くの被害が報告されている寄生生物である。







































